

浮世風流
下
二

特別
13
3474
12



よい物がお手小入まゝに「鳥子」えあつたか中々う漆氏と
ごころはまゝに「おちか」ごころのまゝに加茂翁の彩紙と本居
大人の目の小掃と本ふひじて出入をいじりけまじとる俗と
るひまゝ入られまゝに「茶」を採る「習」ごころはせぬ「先達」
おまゝ「庚子」道の「記」は後「まゝ」に「ハイ」えまゝに「中」
「藤」なまゝで「ごころ」まゝに「あじ」疑「の」の「頃」あつたごころ
るな古言まゝに今のぬひけて「は」ごころの「海」の「まゝ」に「は」
「校合」者の「簿」刺るごころ「あ」く「有」ごころ「な」まゝに「ま」
ごころ

おしを「女子」での「信」まゝに「考」り「後」ごころ「う」ごころ「は」ごころ「せ」目の「針」
で「清」り「あ」まゝに「ま」まゝに「ごころ」の「か」まゝに「ま」まゝに「ま」
ごころ「ま」まゝに「ごころ」ごころ「ま」まゝに「何」ぞ「著」述「が」あつたごころ
ごころ「ま」まゝに「ま」まゝに「借」り「ごころ」ごころ「ま」まゝに「あ」まゝに「三」
「集」を「お」まゝに「ごころ」ごころ「お」ごころ「ごころ」ごころ「は」ごころ「ごころ」
ら「け」ごころ「ごころ」ごころ「一」冊「が」ごころ「ごころ」ごころ「ごころ」ごころ「ごころ」
「イ」ごころ「ごころ」ごころ「ごころ」ごころ「ごころ」ごころ「ごころ」ごころ「ごころ」

るまける奴ハ一たん瘡の者さ遊居てうらまへは知やア後
 来るも隙も猶目坐を丹段をうりて友達やう又くまりの
 一人も後ハ仲もあんなり夜遊するうり異言したらせうこと
 ぬ夜鍋をうて居るとヤ寮なく友達もう集ことまでハ踏込
 ぬや結が重子合で足のま湯が後どサ夫らもや指合揉りぞ
 の女を呼して起て居られ妙からいぶして膝よりほどてあつて
 に知らるる者らうと大福餅くらゆで鶏卵お芋のお田んども
 通るものを買ると云出と騒まると脚膳を飯温んし来こと
 買ふ正月屋でございし買入と呼がとこの困あつあめ人按摩と
 六人まで呼込ぐまぐお肩を揉せまがら風鈴蕎麦を惣は并
 あり蕎麦を煙をさせるとち食ふ物と有頂天をうら
 夜鍋仕事もまふはくもんぢやア後世間ぢやア麻を搗くの煙と
 掃くのとこの其勤毒もな寒声をはくふの室を声と語る
 のと母晩年忘るあんなの手を忘れさして大世月の可ゆること
 ち後入のさしやとまるとりんど些と大屋さんでも頼
 して異見して昔ながら社のき●そんなことあてもせざアうらめ

こゝろ老後市や附小従ふに番催従

たとひせききくわど場さそ見 出来版作

詮方も七茅少の較あり〜 元んと思ふ外

あゝぬは石渡が新板物 骨折甲斐れ

と。討系 志せんの流行も 人気小遇を評判

猶彌増系 志意とまの 志のあもでも博物

乃他の作者に刻の〜 在下が拙作ハ なんと

せう 繪師と作者と板元と たがひの公うち

て仕立あげと親小冊の うらべはらぬ 封

速く封切見〜 需る人の山なまゝ 其は

具員れはたはめく 京阪までも 為登花

櫃〜 書考る 五大力 さいさうむさう 前

編ふ つん かつらりるまきせんふせの 中てあなぞく

はぢはせんも まき 亦面白く四篇目ふ いんめ 残乃縁は のり さち

かろぞく ま 書ふのゆ敷くふ うて 言ぬ い ぬ穿 うかち

ち武もぞく し ち武もぞく し



と志のいふ

文化八年辛未五月八日 ぶん 浮世風呂 うきよ

三編乃稿と脱 さん 銭湯 せん 浴 よく 刻 き

風爐 ふう 中の鼻唄 なか と聴く き 一篇 いつ の狂 きやう

成 な れ れ 仍 なほ 此書 こゝ を ま 跋 ふ に か 撫 な り な げ

たろり樓のあめ

三馬



